



●特集● 災害時における子どもと保育

新しい年を迎え、もうすぐ昨年の大災害から1年になる。昨年の第64回大会では、この大災害を受け学会としてできることを少しでも早く考えていきたいと、緊急シンポジウムを開催した。この活動はこれからどのように継続していくべきか、また、改めて今災害時を振り返り今だからこそ必要となることは何なのか。

会員一人一人が、この問題に丁寧に、また息長くかわっていくことを願ってこの特集を組むことにした。

東日本大震災に学び、 日本保育学会ができること

太田 光洋

東日本大震災で被災された皆様に心からお見舞いを申し上げ、大変な中で子どもたちの命を守り、保育の復興に取り組んでいらっしゃる被災地の皆様に敬意を表します。そして一日も早い復興を心から願っております。どんなに言葉を尽くしても表現しきれないやるせなさとともに、復興への願いを日本保育学会の皆様も感じておられることと思います。

さて、被災した地域の子どもと保育のためにできることは何か。日本保育学会がしなければならないことは何だろうか。われわれ一人ひとりに課せられた大きな宿題である。これに応えるべく理事会において「災害時における保育問題検討委員会」が設置された。委員会では理事会の意向をふまえて活動を進めているのでその内容と想いを紹介しておきたい。

①震災の事実を記録として残すこと。地震や津波が起きた時、その後の保育の中で子どもたちはどんな様子であったのか、保育者は何を考え、どう行動したか。震災後の保育はどのように行われたのか、子どもたちの様子はどうだったか。②原子力発電所の事故による放射能災害下で保育はどのように行われているのか。また子どもたちはどうか。長期的な追跡調査も視野に入れる。③災害後の保育の復旧・復興過程で生じた問題を阪神淡路大震災との比較や当時の課題の改善状況を明らかにする。④さまざまな団体が行っている子どもと保育に関する調査・研

究や支援プロジェクトのデータベースをつくり、研究成果を共有する。

これらを進める際のスタンスとして、保育現場にできるだけ負担をかけないことを心がけたい。被災された園ではその渦中にある保育者に各種調査が多く、現場の負担になっていると聞く。調査データの共有や地域の会員による聞き取りが負担を減らし、地域の主体性と保育者を支えることもできるだろう。

現在取り組んでいるこれらのことから、具体的事実とともに①防災と緊急時のガイドラインづくり、②緊急時に求められる保育者の役割、③緊急時の日本保育学会の役割、④災害の子どもへの影響と保育内容・方法上の配慮、保育活動制限下での保育内容・方法の配慮、保育・幼児教育制度に対する問題などを明らかにし、政策提言などもできると考える。

この震災はまた、改めて保育について考える機会となった。なにもなくなった状況で行われる保育、避難所生活で遊び場を失った子どもたちの遊びスペースができたり、玩具を前にしてむさぼるように遊ぶ姿、送迎距離の問題など。これらは子どもにとって保育されるとはどういうことか、保育者とはなにか、環境とは。子どもにとっての遊び、地域で子育てをすることはどういうことかなど、保育の本質にかかわる問題といえよう。

こうした保育の本質に立ち返りつつ、震災の事実とそこで行われた実践から学び、保育学の叡智と実践力を結集して山積する課題に立ち向かっていかねばならない。日本保育学会のすべての会員の協力と支援が今こそ求められる。震災を忘れないでほしい。災害時における保育問題検討委員会の委員長として、そして保育と子どもを愛する一研究者として各位のご協力とご支援を引き続きお願いしたい。

●Profile

太田 光洋(おた みつひろ)
和洋女子大学 教授、災害時における保育問題検討委員会 委員長
最近では感情労働という観点から保育や保育者を捉えることに興味を持っています。
保育者や学生と保育や遊びの話をしたりするのも楽しいです。

保育者のケアも

東 義也

震災直後、県外から多くの方々がボランティアに駆けつけて助けてくださいました。そのことを感謝しながらも、私は自分の家族と職場と町内会のこと以外は何もできませんでした。1、2 か月はただ呆然としたままだったと思います。5月に大学が再開しても、日常を取り戻すのに精一杯でした。被災地にやっと足を運んだときは、胸が痛くなって廃虚と化した町を直視できませんでした。

しかし、保育所や幼稚園の子どもたちの生活は少しずつ取り戻され、そこで愛する卒業生たちが頑張っているわけで、とにかく会いに行こうと腰を上げました。いろいろと調査の依頼もあったのですが、私にできることは短大時代に親しく交わった卒業生やお世話になった園長・主任の先生方に顔を見せ、その後のご様子をやっとの思いで伺うだけでした。

卒業生といってもまだ若い保育者たちです。津波の水が引かなくて子どもを抱えたまま救助を待ったとか、翌日2階の窓から自衛隊に救助されたとか、4日間園にあるもので食いつないで迎えを待ったとか、想像を絶する経験を聞かされるたびに私の胸は締めつけられました。中には、震災直後から安否確認のために汚泥の中、瓦礫を乗り越えながら、また半狂乱になって家族を捜す人たちが遺体を横目で見ながら避難所を片っ端から回ったという保育者もいました。

半年たっても電気の通っていない地域では、昼間でもトンネルの中は真っ暗です。先生方は毎晩ここを通過して通勤しているのかと思っただけで、私は気が変になりそうでした。冠水したあとで夜の海を見ると、自分たちの場所の方が海面より低く感じて、「海に呑み込まれそうなの」と言っておられました。ある卒業生は、家を流されて小学校の校庭に建てられた仮設住宅に住み、その同じ小学校で保育を再開した幼稚園で働いていました。また、園は高台にあって無事だったけれども、眼下は瓦礫の山と廃虚の町で、それを今も毎日見ながら悪臭を嗅ぎながら生活していることを知らされました。

現在、子どもの心のケアの必要性が叫ばれています。津波や火事を見た子については特に必要だと言われました。ただ、子どもたちは比較的落ち着いているように見えました。被災地であんなに明るい笑顔に会えるとは思っていませんでしたし、私の方が力づけられました。

何箇所か訪問して、私は保育者たちのケアもこれから大切ではないかと思いました。園長先生たちによる

と、保育者たちは震災後張りつめた中で4、5か月必死で仕事をしてきて今は気が抜けてきた。夜の海が今でも恐い。また何が起こるか分からないから、自分の町を離れたくない。研修のためでも都市部に行くのは嫌だということです。先生方がとにかく疲れているという印象でした。

もう一つお伝えしたいことは、同じ園の中で子どもだけでなく当然保育者の間にも被災の度合いの格差という温度差があるということです。家族や家を失った人とそうでない人がいます。また、園舎が流されて子どもも保育者も拡散し、その先々の新しい場所で味わう差別があるとも聞きました。さらに、園に届いた物資を保育者が先に取ってしまったたり、必要以上にもらおうとする姿などもあるそうです。「支え合う」のひと言で解決に向かうのはまだ時間もかかるし難しいようです。

今回の震災で保育所における保育中の死者はゼロと聞きました。しかし、降園後津波に吞まれて亡くなった母子は少なくありません。三陸津波の時と同じように多くの子どもが今回も死にました。そのことを忘れないで、これからの研究や教育、実践に私は臨みたいのです。

●Profile

東 義也 (ひがし よしや)
尚絅学院大学 教授
研究テーマは子どもの遊びとキリスト教教育です。生まれ変わった四年制大学で四苦八苦しています。

3月11日を振り返って

田頭 初美

3月11日、その日は卒園式でした。涙と感動の余韻に浸りながら卒園児や保護者と和やかな時間を過ごしていたその時、突然の地震発生。

「お願い、止まって!」「お願い、こわれなくて!」心の中で叫びながら、テーブルの下で地震が止むのを待ち続けました。

地震は一向に止む気配なく揺れ続け、これは普通ではないと、いやな胸騒ぎを覚えました。

やや揺れが収まり、ホテルの方の誘導で無事外に避難したものの、保護者はパニックに陥り、コートを忘れた、鞆がない、私の〇〇は誰が持っていった?と引き返そうとする方まで出始め、傍らの子どもたちはただ茫然として母親の背中を追っていました。

「とにかく子どもたちをよろしくお願いします、津波があるかもしれません、海岸沿いは通らずに帰って下さい」と叫び続け、全員が帰路に着くの見届けました。

園に戻る道路は渋滞でした。携帯はもちろんつながりません。メールも不通でした。通信網を絶たれ、不安な中、園に戻りました。

夕方には雪も降り始め、停電で真っ暗になってきました。ワンセグから流れてくる津波や余震のニュース、ラジオから流れてくる各地の状況、あまりにも悲惨な状況のなか、救われたのは、ろうそく一本の保育室で親の迎えを待つ子どもの一人が、絶えず大きな声で歌を歌ったり、素話でみんなを笑わせてくれたことでした。

子どもたちのそばにしながら、明日からの保育に思いをめぐらせました。そこには有事の備えがきちんとなされていないことに気付かされました。

職員のうち数名は、津波のために避難所に避難することになり、ガソリンがなく通勤不能になるかもしれない職員もあり、家族が行方不明になった者もいて、園の運営がうまくいくかどうか、不安がよぎりましたが、そうは言っていられません。

出勤が可能な職員で、できることを、と気持ちを切り替え、まずは命の確保。園内外に危険箇所がないか、保育に危険は伴わないか、もしもの時の避難経路などの再確認をしました。次に暖の確保。職員のつながりで、灯油式ストーブを貸してくれる人を見つけ、灯油を分けてくれる人を見つけました。次は食材の確保。スーパーは閉鎖されています。必死で残されたものをかき集め、なんとか4日間はずなぐことができました。ガスは幸い通っていましたが、カセットコンロもたくさん集めました。そして保育の確保。頻繁にやってくる余震に備え、いつでも身を守れるよう午睡用のかけ布団は子どもたちの傍らに置きました。できるだけ普段どおりに、を心がけました。

保護者からもスーパーが開いた、豆腐が大量に入った、スタンドが開いている等たくさんの情報と差し入れをいただき、なんとありがたかったことか。

家が津波で半壊してしまった園児や車が流されてしまった園児もあり、ご家庭のフォローの大切さにも気付かされました。園児の中にはせっかく描いた絵を「つなみだぁ・・・」と言いながらクレヨンで塗りつぶす子もいて、しばらくは落ち着かない状態が続きました。

1学期末、最後の一家庭が避難所から自宅に戻り、ようやく園も通常の姿に戻りつつあります。

2011年日本大震災 子どもの中において

生駒 恭子

3月11日一瞬にして2万人もの尊い命が失われました。そしてまた、東京電力株式会社福島第一原子力発電所及び福島第二原子力発電所における事故は、放射能物質の放出をもたらし、福島県のみならず周辺の各県も含めた広範囲に影響を及ぼす事態となりました。事故発生から8ヶ月を経過した現在においても、事故の収束に向けた作業は続き、事故により放出された放射性物質による汚染の問題や不安は時間経過と共に拡大しています。その意味においては今だ「災害時」ととらえることが出来ると感じています。福島で保育に携わり子どもとの暮らしの中にいる多くの保育者が原発事故以後、放射能による不安から避難する家族、福島に残る家族、それぞれの苦悩や痛みをそばで感じてきました。そして、保育者として本当に子ども達にふさわしい暮らしや保育をしているのか・・・という苦悩や痛みを持ちながら暮らしています。

しかし、苦しいことばかりではありません。この震災と放射能の問題は、私たち保育者に生きる喜びと困難へ対処する力、子どもを信じ子どもと共に生きることを喜びと感じられる心を教えてくれたように思います。様々な制限のある中で展開される日々の暮らしの中で私たち保育者は子どもの言動やしぐさに心を奪われずにはられません。「創意」する子どもの心のそばにいる楽しさの中に現状の「危機」を乗り越える様々な発見があるからです。

文部科学省より、平成23年4月19日に出された「福島県内の学校等の校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方について」福島県内の学校等の校舎・校庭等の利用判断における暫定的考え方が示されました。けれどもこれは、幼稚園で教育の対象者である幼児と小学校以上の児童・生徒・学生の戸外における活動の取扱いに同じレベルでの対応がふさわしいのか、幼児期の特性を踏まえた保育がなされるのか保育者と保護者の不安や混乱を増幅させることにもなりました。「安全」と「安心」とは一体どのようなことでしょうか。「安全」とされる放射能に対する様々な基準レベルが科学的な説明として打ち出されても、どうして我々は「安心」出来ないのでしょうか。本当に複雑な問題は「こころ」という科学的な解説や説明をこえる中にあると感じます。日本が抱えたこの「放射能汚染」という問題を自分の課題とし様々な仲間と協力しより良いものへと変化させていくことで、自分の内なる世界に「安心」をはぐくんでいくのだと思います。放射

●Profile

田頭 初美 (でんどう はつみ)
学校法人 鳳鳴学園 理事長
光星学院八戸短期大学 非常勤講師
研究分野・・・保育者論、心理学

能の問題はこれから30年以上にも渡り子どもと私たちとともにある問題となりました。私たち大人が少しの「安心」を感じ今の暮らしを前向きに進められる方法は子どもの中にいて子どもの心に「ふれる」ことだと思います。子どもの「こころ」に触れながら創意工夫し創り進める暮らしには温かく明るい世界がかもし出されています。

大人のそういった行動を子どもが感じ取れる状況を作り出すこと、そして保育の中で自分の置かれている状況や問題の中から課題を捉え、仲間と協力し合っより良いものへとする力を育む保育展開が必要だと思います。子どもと大人が一緒に暮らしや遊びの中の智を深く考えることこそ子ども達の未来であり、私たちの未来そのもののように思います。この震災を体験した子ども達がやがて生活者として市民として豊かな社会を築く力を育ていけるよう最善の努力を全ての大人で取り組まなければならないと感じています。

●Profile

生駒 恭子 (いこま きょうこ)
福島県いわき市 ほうとく幼稚園 副園長
原発事故は、大人以上に子どもたちの生活に大きな影響を与えています。それは、子どもの未来、日本の未来そのものではないでしょうか。今、子どもたち一人ひとりに必要な研究を子どものそばで積んでいきたいと思っています。

問われる保育の今

磯部 裕子

3月11日の東日本大震災により、私の勤務する宮城県は、未曾有の被害を受けました。幼稚園、保育所も例外ではなく、津波によって全流、全壊した園も少なくありません。幼い尊い命もたくさん失われ、この地域は深い悲しみと絶望に直面することになりました。

震災直後は、ライフラインが止まり、保育の現場に何が起きているのか、それを把握することさえ困難な状況にありました。数日後あたりから、少しずつ入ってくる情報は、私の想像をはるかに超えるもので、まさに途方にくれ、言葉を失いました。8ヶ月経た今も、この震災を語る本当に適切な言葉は見つけられずにいます。

「何から手をつけるべきなのか」それさえもわからないまま、とにかく今すぐに動ける仲間を集い、保育の再生を支援する「みやぎ・わらすっこプロジェクト」を立ち上げました。プロジェクトの趣旨を全国の仲間が発信したところ、多くの保育関係者、学会の皆様か

らくさんの物資や支援金を頂戴し、それらを抱えて被災した幼稚園、保育所を走り回る生活が続きました。みなさまの温かい支援に、被災地はどれだけ救われたか知れません。

震災から8ヶ月が過ぎ、被災地は、再び寒さの厳しい季節を迎えようとしています。すべてが無くなった幼稚園、保育所も間借りした場所や仮設の園舎で保育を再開するまでになりました。津波によって瓦礫と泥にまみれた園舎もリフォームを終え、きれいな園に生まれ変わり保育がスタートした園もあります。NGO、NPOの支援を受けて新たな園舎の建築に取り掛かっている園もあります。これらすべてのことは、震災直後には考えることもできなかった動きです。

だからと言って、私たちは今の状況をもってして、すぐに「復興」とか「再生」という言葉で語ることは出来ません。まだまだ被災地の保育現場が乗り越えていかなければならない課題は山積の状況にあるからです。

しかし、こんなにも過酷な状況下にあっても、保育者は子どもの命を守り、子どもの居場所を再生しようと日々懸命に努力してきました。限られた環境下で保育するための知恵を出し合い、地域のネットワークを最大限に生かしながら、ここまで歩いてきたように思います。そのプロセスで生成した実践は、単に「被災地の教訓」というレベルのものではなく、保育の本質への問いでもあり、わが国の保育制度の課題への挑戦でもありました。紙面が限られているため、ここにそれらの具体を記すことはできませんが、いずれ被災地の保育者によって、発信される時が来ると思います。

自然の災害は、私たち人間の手でそのすべてを防止することは出来ません。しかし、私たちの知恵とネットワークによって、それらと向き合うすべを生み出すことは出来るのではないかと思います。被災地の保育者に限らず、私たち保育に関わる者すべてが、今その知恵を出し合うべき場に立たされているのではないかと思います。

保育現場が早急に取り組むべきこと、地域全体で再考すべき課題、研究者が整理すべきテーマ、国が整えるべきシステム等々、それぞれの立場に突きつけられている問題を一つひとつ解決していくことでしか、被災地の保育の本当の意味での再生はないのではないかと思います。

●Profile

磯部 裕子 (いそべ ひろこ)
宮城学院女子大学 教授
主たる研究領域は、保育のカリキュラム論
震災後、地域の保育者仲間と共に、「みやぎ・わらすっこプロジェクト」を立ち上げ、被災地の幼稚園、保育所を支援する活動を行っている。
HP <http://warasukko.mukaiyama.ac.jp/>